

「おばけの声」を美しい音楽に 池田尚子さん (2000年~2002年、王立芸術大学)

カンボジアに初めて青年海外協力隊員が派遣されてから、来年2015年で50年。半世紀に渡る協力と交流の軌跡を、日本とカンボジア両国の関係者の話を伺いながらたどります。初回は、音楽隊員として2000年から2002年までプノンペンの王立芸術大学に派遣された池田尚子さんです。

◆  
昨年、プノンペンのインターコンチネンタルプノンペンで開かれたチャリティコンサート。カンボジアの若き音楽家たちを育てる目的で、収益はコンサートと並行して行われたオーディションの優秀者に贈られる。このとき、見事奨学金を勝ち取った声楽(テノール)の学生はこう言った。「10年以上前、日本人の先生が初めてオペラを見せてくれた。それが、この道を目指すきっかけになったのです」。

「先生」、池田尚子さん(38)。2000年から2002年の間、王立芸術大学に青年海外協力隊員として、西洋音楽を教えるために派遣された。カンボジアで初めての音楽隊員だった。



■当時の王立芸術大学での授業

当時、王立芸術大学音楽学部には、200人余りが学生登録していたが、実際に通っていたのは1割程度。内戦前は、西洋音楽を教える外国人教師陣も充実し、楽器や施設も整っていたが、当時は何もかもが足りなくなっていた。カンボジア人の先生たちも、生活費のために別の仕事と掛け持ちせざるを得ない状態だった。集まる学生たちは、音楽の基礎教育を受けていない人たちがほとんど。なぜ芸大に来たのかを尋ねると「お

金がなくても入れる王立だから」「村で一番歌がうまい、と言われたから」。

壁は高いが、池田さんにはチャンスに見えた。「何もないということは、何でもやっていい、ということでした。手当たり次第に取り組みました」。その中に、クメール語で解説を入れながら、オペラのDVDを見せる

授業があった。オペラなど見たことがない人たち。独特の歌唱法は「おばけの声」と言われた。池田さんは「この音楽を美しいものとして分かち合いたい」と心から思った。

2年間の派遣期間では、なかなか結果を見ることが難しい、と池田さんは言う。「いら立ちも感じますが、一方で、時間をかけないとできないことがたくさんあるということ学びました。それでまたカンボジアに戻ってきてしまいました」。

帰国して大学院へ進学し、その後小学校の教員を経て2007年にJICAプロジェクトの業務調整員として再びカンボジアへ移住した。プロジェクトは地方行政官らの能力向上を目指すもので、音楽とは直接関係ない。

が、音楽でこの国とつながっていたい、と考える池田さんは、音楽教室の普及事業を立案し、日本のコンサルティング会社アイシーネットの主催する起業アイデアコンテストで優勝した。カンボジアの音楽教育の現場を体感した池田さんだからこそその説得力があり、高く評価された。

貧しい人たちや地方の人たちにも、平等に音楽に触れるチャンスがあるように、願いを込めたプロジェクト。その第一歩となる音楽教室を、2015年には開設したいと考えている。



■池田さんと家族